

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第4回業務推進全体会合

逐語録

(木村^浩) では、第4回の業務推進全体会合を始めていきたいと思います。よろしくお願いいたします。今年度の仕事ももう少しで終わりますので、今日はまとめに入るような回になるとと思います。

まずは資料を確認していきたいと思います。まず議事次第があります(4-0)。次に、第3回業務推進全体会合の議事録案です(4-1)。次に、1枚の紙で目次と書いてある資料があります。こちらが4-2になります。次が、「業務結果説明書」です(4-3)。次が、「コミュニケーション・フィールドの関連研究整理」という資料です(4-4)。次が、「コミュニケーション・マニュアル」です(4-5)。次が、「フォーラム計画書」になります(4-6)。次が、「平成25年度の研究計画」というパワーポイント資料で、4-7になります。最後に、「業務計画書(平成25年度版)」が4-8です。

それでは早速、内容に入っていきたいと思います。今日は、最初に議事録を確認して、次に平成24年度の業務報告をして、最後に来年度の計画を少しご紹介していくという流れになります。

1. 議事録確認

(木村^浩) まず、議事録の確認です。第3回業務推進全体会合の議事録と逐語録は、あらかじめメールでお送りしておりますので、ご対応いただいているかと思います。

簡単に、何をやったかだけを確認をしていきたいと思います。前回は、「2. 社会調査グループ進捗報告」が詳細になされたということになります。土田先生から、社会調査の結果について紹介していただいたと。これにほとんどの時間が使われました。これを受けていますので、本日はこの部分についての議題は特に用意していませんけれども、現在これを報告書にまとめる作業に取り組みつつあります。

また、「3. フォーラム検討グループ進捗報告」ということで、フォーラム参加者の確定について、ご紹介をしているということです。ここに関しても今日は議題はないのですが、現在、残り4名を決定する手続き中ということです。やはり、5回あるということが一番バリアが大きいようです。この辺は課題ということで、次年度は、もしかすると全日3回くらいにしたほうがいいのかという感触を得ているところではあります。参加者については、できるだけ3月中に決定をして、報告書は確定したということを出したいと思っております。

以上が、簡単な前回の議論ですけれども、議事録案について何かあれば、この会議が終わったときでも構いませんし、メールでも構いませんので、よろしく願いいたします。

2. 平成 24 年度業務報告

(木村_浩) 次は、24 年度の業務報告です。

資料 4-2 は、文部科学省指定の形式に則った目次になります。ほとんど前回お出しした目次と変わらないのですが、少し章立てを変えています。この報告書のドラフトは 4 月 19 日に提出ということになりますので、3 月中にやった結果を 4 月の前半でまとめて、その後、PO（プログラムオフィサー）の岩田先生の確認を経た後に、最終的な提出は 5 月 30 日という予定になっています。なので、4 月の前半に、皆さんに報告書の内容についてメールベースでお聞きすることになるかもしれませんが、よろしく願いいたします。

本日は、「3. 平成 24 年度の実施内容及び成果」について検討します。3. 1 は前回土田先生からお話いただいた内容がほとんどですので、皆さんの中で共有できたかと思えます。今日は 3. 2 について議論していこうと思います。

大きくは、「コミュニケーション・フィールドの関連研究整理」がどうなっているのかという話を竹中君から話していただくのと、「フォーラムの設計」に関する部分を「フォーラム計画書」に従って、大石さんから話していただくと思っています。

その前に、全体の話として資料 4-3 をご用意していますので、全体の進捗の概要を確認していただければと思います。資料 4-3 は業務計画書に対応する形で書かれている資料になります。（2）業務の実績の説明、について簡単にご紹介します。

「1. 社会調査の実施」に関しては、特に問題なく実施がされているということです。2 ページ目に概要が書いてあります。こちらは前回議論した内容ですので、省略させていただきます。

「3）フォーラム参加者への意識測定項目の作成」。これは前回特に説明しませんでしたので簡単にお話をしておきますと、フォーラム参加者に対して、各フォーラム終了時に、原子力に関する利用、必要性、安心感、コスト感に関する質問を含むアンケートを実施する。さらに、一連のフォーラムの前後、つまりフォーラムが始まる前とフォーラムが終わった後には、情報行動、電気使用行動、経済情勢、国際情勢、階層帰属意識の項目を含む詳細なアンケートを実施することとなった、ということです。ただし、アンケートの実施に際して、個人情報の取り扱いについてはさらに検討の必要があるということで、こちらは次年度に検討する課題ということになります。

個人情報の取り扱いというのは、フォーラム参加者に各回にアンケートをするわけですが、そのときは個人と結びつけた形でアンケートに回答してもらい、かつ、発言記

録とも結びつけるということをやっていきますので、かなり個人情報の取り扱いに気を付けて、それに承認をいただいた形で進めないといけないということです。そういうことをどのように確保しておくかということを考えておく必要があって、その手続きを次年度フォーラムを実施する前に検討しておきたいということです。

これはまだ、具体的な質問項目は皆さんにお見せできませんけれども、そちらも次年度のフォーラム前にはご紹介できるかなと思います。

次は、「2. フォーラムの設計」ということで、「1) コミュニケーション・フィールドの関連研究整理」に関しては、竹中君が説明してくれる部分になります。

「2) フォーラムの設計」についても、パブリック・アウトリーチから東大にあがってきた「フォーラム計画書」に基づいて簡単にご説明をいただいてから、共有していきたいと思います。今日は大石さんは早めにお帰りということなので、順番を逆にしまして、フォーラム計画書を説明していただいて、その上でこの部分についてディスカッションをしたいと思います。では、大石さん、お願いします。

(大石) 資料 4-6 になります。基本的にこれは、フォーラム検討会議で話し合われた内容について、議事録を基にまとめているというスタンスになっています。

1 章では、フォーラム開催の目的と、その目的を達成するための課題と方策についてまとめています。

「1. フォーラム開催の目的」というところは、フォーラムの案内状（フォーラムへのご協力のお願ひ）などを書いてある文言をなるべく忠実に再現するという意識で書いてあります。まず、「フォーラム」の目的は、原子力に関わっている人たちが世間では「原子カムラ」と呼ばれてしまうという事実に対して、「市民（一般の人たち）」と「ムラびと（原子力専門家）」とが「原子カムラ」の境界を越え、新しい関係性を生み出していくためにはどうしたらよいかを明らかにすることである。

具体的には、「市民」と「ムラびと」が新しい関係性を生み出していくところとしてコミュニケーションの場（フォーラム）を設計し、コミュニケーションの場における「市民」と「ムラびと」の相互作用（ダイナミズム）を記述し、コミュニケーションの場における「原子カムラ」を越えるための要件を洗い出す。

議論の中でも言葉が錯綜していて、「市民」と言ってみたり、「一般の人たち」と言ってみたり、それから、アンケートの中では「一般の人たち」「原子力専門家」という言葉を使っているの、なるべく統一性が取れたほうがいいかなと思って、カッコして「一般の人たち」「原子力専門家」と書いています。意識して文言を使っています。

最初に議論したところは、「原子カムラ」の境界を越えるための課題と方策というところだと私は認識しているのですけれども。まず「原子カムラ」の問題点として、世の中に「原子カムラ」と呼ばれるものが存在し、この存在が正当な原子力に対するコミュニケーショ

ンを阻害している。

それから、「原子カムラ」を形作っている原因として、2つあるのではないかと。①「市民」と「ムラびと」の間に、認識のギャップがある。この認識のギャップは、「市民」と「ムラびと」との社会的リアリティ（その人が生きている世界はどういうものか、誰が周りにいて、どういうことを考えていることが「普通」なのか、ということ）や原子力問題のフレーミングが異なっていることから生じると考えられる。社会的リアリティという言葉が後半に結構出てくるので、フォーラム検討会議では「社会的リアリティ」という言葉をこう認識しているということで書かせていただきました。

それから、②「市民」と「ムラびと」の相互作用（ダイナミズム）である。お互いに、相手の認識はわからない。このため、思い込みにより相手の認識を勝手に作り出し、そうであると思ひ込む。その思い込みの認識によって、お互いに、自ら心理的な壁を作ってしまう。これが、「原子カムラ」という集合を作り出す区分線（境界）となる。

次に、「(3)「原子カムラ」の境界線を越えるための課題」を整理しました。(1)(2)より、「原子カムラ」を形作り、「市民」と「ムラびと」のコミュニケーションを阻害していると考えられる原因を解消するための課題として、以下の3つが挙げられる。①誤解なく相互理解する（相手の考え（意見・感情）を誤解なく認識すること）。②相互理解の結果またはそのプロセスにおいて、“相手に関する思い込みの認識と実際は異なる”ことを認識すること。③相手に関する認識を、自らが変容させる（リフレーミングする）。こういうことを課題として整理しました。

この課題を受けて、次に、その境界を越えるための条件と方策を整理しました。

この辺りは、どのように体系を表現したらいいのかなど私の中でも悩んだところなのですけれども、「条件」という言葉にしました。3つの課題を解決するために必要と思われる条件と、条件を満たすための方策について、整理しました。

条件1：フォーラム参加者が目的を共有。

ここは、それほど正確には議論の中では出てきていないのですけれども、あえて書かせていただきました。まず、フォーラムはコミュニケーションの場であることから、フォーラムに参加する「市民」と「ムラびと」の間でコミュニケーションが成立することが必要不可欠である。そのためには、参加の目的を共有すること、今回のフォーラムにおいては、両者がフォーラムを通して相互作用を起こすという目的を共有することが前提となる。

また、コミュニケーションの本来の意味は、「人と人が関わろうとする試みであり、話しかけ応じていく Two-Way」であり、お互いの情報の移動が起こり、相互作用としてお互いに変化が起こることであることから、以下の2つの条件が挙げられる。これも木村先生の資料から引用させていただいたのですけれども、出典は「コミュニケーション・センス」という福田健さんの本です。ここは、フォーラム検討会議で議論を深めたところなので、前提として書かせていただきました。

条件 2 : Two-Way の情報移動。

原子力に関するコミュニケーションでは、従来の情報移動は、「ムラびと」→「市民」であることが多いため、「市民」→「ムラびと」の情報移動になるような話題を提供する。但し、話題は、条件 1 を満たすことに留意する必要がある、そのためには、両者が情報移動は「価値がある」と共有できるようなものであることが必要である。

話題例として、これもフォーラム検討会議の中で出てきたお話ですけれども、「安全神話」「リスク」等原子力に関わる問題。本研究において、「原子カムラ」を越えることが目標であるため、原子力の話題を避けることはできないが、市民がどのように考えているかを知ることが価値があることであり、(ムラびとがその価値を認めるのであれば)「市民」→「ムラびと」の情報移動は起こりうるテーマではないか。

2 番目に、「放射能」「原子力発電」等原子力そのものに関する話題。原子力そのものであっても、市民の日々の生活からの感覚で話すことができるのであり、(ムラびとが市民の考え方を知らうとする気持ちがあれば)「市民」→「ムラびと」の情報移動は起こりうるのではないか、という検討がされました。

条件 3、ここが一番大事なところですが、相互作用としてお互いに変化が起こる。

変化とは、お互いの解釈・思い込みの変容、価値観の変容、リフレーミング(出来事やものごとの意味の枠組み(フレーム)を変化させること)や、新しい気づきが起こることである。そのための方策として、以下のようなことが挙げられる。フレーミングという言葉が何回か出てきているのですけれども、その都度意味を書き加えています。

①社会的リアリティの共有。参加者がお互いに「社会的リアリティ」を共有することは、相手の考えを誤解なく認識し、“相手に関する思い込みの認識と実際は異なること”を認識するなどの「気づき」にも大切である。

②ファシリテーターを体験。参加者にファシリテーションを経験してもらおう。「自分の意見を言う」というよりも、周りの意見を聴き、場を作っていくという「ファシリテーション」の体験を通して、「気づく」機会が増える効果が期待できる。一方、発言者にとって「ファシリテーター」の存在は、自分の発言の意図が正しく伝わっているのかを確認できる効果などがある。

③協働作業。話し合うだけ、観察するだけでは、気づくことはあっても変化は難しい可能性もある。「変化」を促す(きっかけになる)ために、市民とムラびととの協働作業を行う。例えば、「意見をまとめる」というグループ作業では、グループの「社会的リアリティ」=「グループの和を乱したくない」という力が生まれる。かもしれないということなのですが。このまとめようとする行動は、普段の(社会的)リアリティを抑制する可能性がある。また、役割によっては知識とは関係ないスキルがありうることなどの気づきを通して、変化のきっかけになりうる。

④十分な時間。「変化」を起こすためには、フォーラムには十分な時間が必要である。

条件4：参加のメリットと書いてあるのですが、ここについては、書いていいのかわからないながら、あえて書かせていただいています。

フォーラムの参加は、社会的意義だけでなく、参加者個人へのメリットを提供できることが、参加へのモチベーションにつながる。参加者のメリットとして、以下のようなことが想定される。ここは、フォーラムの案内状を書くときにも議論したところになります。

市民のメリットは、研究に参加できる。学術的成果が上がる。専門家に会える、会話ができる。意見を言える。わからないことを質問できる。謝金。最後にシンポジウムで、社会に対して（参加者が寄与した）フォーラムの成果が発表される、などが意見として出ていました。

ムラびとのメリットとしては、市民の感覚を知る。市民とムラびとの認識のずれを知る。ムラびとが過剰反応していたことを知る。市民の考え方を知ることにより、突っ込まれない話し方等が出来るようになる、などです。

これは、あくまでもフォーラム検討会議で想定しているメリットです。

これらの検討を前提に、フォーラムの具体的な計画を話し合いました。

（木村^浩） たぶん、これを全部読んでいると時間がかかるので。ここまでは目的ですから、しっかり共有しておこうかなと思いますけれども、この後は、重要どころだけピックアップして読んでもらえればと思います。

（大石） 分かりました。

まず、フォーラム実施者は研究実施者と研究協力者という2つでいいかということは、ご確認いただきたいと思います。

8ページに、フォーラム参加者の選択方針をまとめています。ここについても、この記載で間違いがないかということを確認していただけたらと思います。選択に際しては、年齢、性別など「社会的リアリティ」の異なるメンバーが望ましい。一般の人、原子力専門家ともに原子力に関して様々な意見を持つ人が選ばれることが望ましい。これらを考慮して、年齢（2段階；20～40代、50代以降）、性別（2段階）、原子力の利用（2～3段階；賛成、反対、どちらともいえない）を目安に選択するという方針を立てました。

「2.1.3 フォーラム参加者の申し込みの結果」というところで、対象となったものについて、傾向をまとめてあります。後でお読みになって、この表現がまずいということであれば、訂正したいと思います。

9ページの（3）、一般の参加申し込みが少なかったことに対して、次年度以降への方針も含め、以下のような考察を行なったというところも、今確認したいと思います。ひとつは、依頼母数が少ないのではないかと。アンケート配布に対する申し込みの割合は、一般の

人も原子力専門家も同程度であるので、一般の人の募集の仕方を変えたほうがいいのではないかという意見が出たと記憶しています。あとは、参加者募集の方法として、インターネット調査などもひとつの方法ではないか。あとは、今年度成果の公開をしていくことで、理解が進むのではないか。3点にまとめました。

10 ページの参加者の選択というところでは、事実を議事録に沿って記載しています。「参加者の追加」というところに関しては、まだ途中ということで、現時点での記載に留まっています。ここも、確認したいところです。

追加の条件として、男性は 20～40 代。Q5 は賛否どちらでも可。女性は 1 人は 20～40 代で、3 人とも Q5 は「賛成」か「どちらともいえない」が望ましい。Q5 というのは、後ろのほうにある添付資料 3 の Q5 のことです。これは実際に使われた申込書なのですが、原子力利用に関する質問のことを言っています。

追加募集の方法として、そのときの話し合いの中では、顔見知りでない人がいいだろうということ。メール等で趣旨を説明し、協力の同意が得られた後はフォーラム申込書と返信用封筒を郵送し、PONPO 宛に返信してもらう。追加は 4 名であるが、多めに募集をかけ、他の参加者とのバランスを見て決定すると。

途中の状況で終わっているので、報告書として提出するときには、結果まで含めて書き直す必要があるのかなとは思っています。

あとは、13 ページの実施計画のところでは、第 1 回から第 5 回の日時と、実施内容とテーマ、公開非公開というのを一覧表にしてあります。詳細については、話し合っただけで何回もまとめられていることなので、問題はないと思います。

第 1 回のプログラムを 14 ページに書いています。ここについても、議事録等できれいに図などがまとめられていたりするので、それを利用して、改めて時間に合わせて書いています。

ここでひとつ確認したいことは、実は、このプログラムの時間割り当てを決めた後、情報提供の時間を減らしましょうという意見が出ました。時間がタイトであり、また、ファシリテーションに関する情報提供は第 2 回以降のほうがいいのではないか（実際にファシリテーターを経験した後のほうが理解しやすいのではないか）という意見があって、時間を縮めることにしたのです。しかし、具体的な時刻についての確認がないまま検討会議が終了しているので、こちらのほうでそれを前提にして時間をずらしています。なので、ここは 4 月以降、フォーラム開催の前の議論の中で、皆さんの中で検討していただけたらと思っています。

それから、フォーラム検討会議のメンバーで模擬フォーラムをしました。その中で、サブファシリテーターの動き方などについていろいろな知見が出てきたので、添付資料 5「サブファシリテーターの役割とグループワークの進め方の注意点」というところにまとめました。ここについても、4 月以降確認、調整していただければありがたいと思っています。

以上です。

(木村_浩) はい。ということで、フォーラム検討会議の中で形になってきたところをまとめていただいたということになります。

細かい文言などは、いずれにせよ私が全部チェックして、報告書全体で統一感をとらないといけないので、そういう修正はしますけれども、方針や、その後計画してきたことの概要には大きな問題はないと思います。ご意見、ご感想をいただけたらと思います。

(土田) 社会的リアリティを重視しているということをせっかくここまで言っているのであれば、1.2.1の(1)で『原子カムラ』と呼ばれるものが存在し」と言い切ってしまうのはどうかと思います。「存在すると認識されることがあり、この認識が正当な原子力に対するコミュニケーションを阻害している」という、あくまでも認識の問題だという形にしたほうが分かりやすいと思います。

(木村_浩) そうですね。

あと、私が考えているのは、報告書にまとめていく際には、やはり社会調査をした結果見えてきた「原子カムラ」像もこの中にフィードバックしたほうがいいと思うのです。もし、ここは特にフィードバックとして書いておいたほうがいいというご意見があれば、伺いたいと思います。

(土田) やはり、原子力に携わっている人や組織に対する印象(Q17)についてでしょう。首都圏住民と原子力学会員の間にかかなり大きなギャップがあったので、まさに認識のギャップがある。

これは解釈の問題なのですが、私から見れば、原子力学会員のほうが自ら壁を作って、自分たちは「ムラびと」ですよ、と宣言しているような印象を持ちました。

(木村_浩) やはり、そこを踏まえた書きぶりにしたほうがインパクトは大きい気がしますね。

(土田) それを了解してもらえるのであれば、ムラびとたちが変わるというところの具体的な目標になるのではないかと思います。ムラびとが思っているほど世間の人はムラのことを考えていないというか、そんな目では見ていないというか。

(木村_浩) ありがとうございます。その他はいかがでしょうか。

前半の目的の辺りは、何回もこの中で共有してきたところを文章化していただいたところです。後半の部分では、フォーラム検討会議で我々が何を検討していたのかが少し見え

たかなと思いますけれども、実際に模擬フォーラムを開いて、具体的な注意点を整理したり。そういうことをやっていたということですね。

—— 来年度フォーラムを実施して、そのまとめはいつまでにやるのですか。

(木村_浩) 来年度の計画については、例えば資料 4-7 を見ていただくと、スケジュール感が少し見えると思います。

スライド 3 を見ていただくと、赤い部分と緑の部分があると思います。赤がサイクル 1、緑がサイクル 2 です。この中で、白い文字の部分が今年度実施した部分になります。黒い太字が来年度の部分です。

「コミュニケーション・フィールドの改善案の整理」までが、フォーラムの第 1 サイクルになりますので、11 月くらいを目安に、フォーラムの結果をまとめていきたいということになります。

その結果などを受けながら、第 2 サイクルの Plan が始まっていくのですけれども、また社会調査等やって、今年度と同じようなスケジュールでその後回っていくと。こんなイメージです。

フォーラム自体は 7 月で終わることになっていて、シンポジウムが 8 月にあります。フォーラム期間中、アンケート調査が行われて、その後、アンケート分析とインタビューが同時並行で行われます。インタビューはフォーラムの後に行なわれていきます。

フォーラムの発言記録も取りますので、その記録と、インタビューと、アンケートとを総合的に分析するのが、9 月、10 月、11 月くらいです。態度のダイナミクスという部分はそこである程度まとめたいと思っています。あとは、フォーラムのユーザビリティなども含めて、一通りのまとめをしたいと。そういうスケジュール感で進めたいと思っています。

来年度については、後半に時間があれば、またご紹介していきたいと思います。

—— 最終的には、2015 年 3 月と。

(木村_浩) はい。その予定です。来年お金がちゃんといただければ。

—— お金がつくかどうかは、成果を見て判断されるわけですか。

(木村_浩) はい。なので、来年度の中間評価のときに、どういう成果があげられているか、ということだと思います。

他はいかがでしょうか。よろしいでしょうか。そうしたら、また何かあれば、引き続きコメントをいただければと思いますし、これで確定というものではないので、また報告書

に直していったときに、皆さんにはご確認をお願いしたいと思いますので、もしそのときに何かあれば、コメントいただければと思います。

それでは、次にコミュニケーション・フィールドの関連研究整理についてです。今まで何回か竹中君に説明していただいているところでもありますけれども、少しまとまってきたところを確認したいということですので、説明をしてもらって、お話をしていきたいと思います。ではお願いします。

(竹中) 資料 4-4 の全体の構成なのですけれども、まず最初にコミュニケーション・フィールドを網羅的に整理して、そこから何がいえるのかということを見ています。次に、Renn らの、具体的な市民参加に対して、どのような評価方法で評価していくのか、そしてその評価方法で事例を評価した結果どういうことが言えるのかということをもとめています。ここまでが、過去のコミュニケーション・フィールドの事例です。

その次に、本プロジェクトをどのように位置づけていくのかということを見ていくために、福島事故以後のコミュニケーション・フィールドを考えています。福島以後に行なわれたものとして、討論型世論調査を見ています。

ここまでの 3 つ、網羅的に見たものと、Renn らの研究と、討論型世論調査を見た上で、福島以後のコミュニケーション・フィールドにはどういった課題があるのかということを設定し、それに対して本プロジェクトの意義と目的を設定するというのが全体の流れです。

最初に、網羅的に見たときにどういうことが言えるのかということをお話したいと思います。資料 4-2 の目次のほうとはナンバーがずれているので、直さないといけないのですけれども、2. 1. 1 で既往のコミュニケーション・フィールドの整理を行なっています。ここは第 1 回全体会合のときに説明をさせていただいたので、細かいところは省いて、重要なポイントだけを指摘します。

まず、4 ページ、実は、コミュニケーション・フィールドの妥当性が検証されている研究がないということ。あとは、コミュニケーション・フィールド同士の比較をして、こういうケースにはどういう手法が有用であるのか、というような比較研究もなされていないということ。コミュニケーション・フィールドの選択が非常に難しいという点が 1 点挙げられるかと思います。

もうひとつ、全体を整理することで分かってきたのは、図 1-2 を見ていただきたいと思いますが、「参加・協働・権限移譲」という市民参加手法になってくると、コンセンサスが求められてきたというのが、今までの研究で総括していえることであると。

この 2 点が、既往のコミュニケーション・フィールドの整理において重要なところかなと思います。

次に、「2. 1. 2 市民参加を目的とするコミュニケーション・フィールド」。ここは

Renn らが著した「Fairness And Competence In Citizen Participation」という本を基に整理したものです。この本の構成なのですが、最初に市民参加をどのように評価すればいいのかということの研究をしまして、その後、その評価軸を使って事例を評価していく。それらをもって、総括して何が言えるのか。そういう構成になっています。

2. 1. 2. 1は、評価手法に関して述べています。長くなるので飛ばしますが、大事なものは8ページの表1-2になります。評価軸を設定する際に、Rennらは、Habermasのコミュニケーションの理論を基にしました。Habermasは、コミュニケーションするときスピーチ(話す)というのをどのように分類すればいいのか。そして、どういうルールに基づいて、話すということを行えばいいのかということ述べています。それが表1-2です。

Rennらの研究は、このHabermasのルールに足りない点考えた上で、ルールを改良をしているところが特徴的です。どこを改良したのが、9ページに箇条書きで書いてあります。

Habermasの理論などを基にして、Rennらは、評価軸としてフェアネスとコンピテンスという2軸を取り出しています。フェアネスというのは、参加者が公平に議論に参加できるということ。コンピテンスというのは、参加者の能力という意味です。参加者の能力を最大限に引き出すためにしっかりとした手法が取られているかということ。

Habermasが、このフェアネスとコンピテンスに対してある考え方を持っているのですが、そこに足りない点として、9ページの箇条書きの2点をRennらは述べています。1つ目は、フェアネスを確保するためには、参加から議論を解決するまでの全てに参加者が平等に関与することができる必要があると。Habermasは、もう少し限定的な意味でフェアネスを述べていたのですが、Rennは、もっと広げた意味で公平性を取らないといけないのではないかと述べています。

2点目のコンピテンスに関して、Habermasは個人の素質に由来しているところが大きいとしているのですが、Rennは、確かに個人の素質に由来しているけれども、その個人の質を最大限に伸ばすところを作っていきますと主張しています。

これを受けて、Rennらは、どういうルールに基づいてコミュニケーションをしていけばいいのかということ述べています。表1-3が大まかな図なのですが、41ページの付録Bに、この表1-3に合わせた形の細かい評価軸が載っています。これは原文を直訳したものなのですが、実は、これをある程度使えるように改良したのが資料4-5「コミュニケーション・マニュアル」になります。Rennらの評価軸を基にして、コミュニケーションをする際にどういうルールに従えばいいのか、ということまとめたのが、我々が考えたコミュニケーション・マニュアルになります。

ということで、ここまでがRennらの評価軸になります。

この評価軸を使って、実際にどのように評価したのかということが12ページ以降にまと

められていますが、事例の細かい評価は今回は説明を飛ばします。

22 ページを見ていただきたいのですが、ここからは、個別の事例の評価をまとめたときにどういったことが言えるのかというのを Renn らが述べているところです。図 1-3 と表 1-12 は、それぞれの市民参加の事例を総括して見たものなのですが、これは、この手法が駄目であるということを知りたいのではなくて、それぞれの手法に適した分野があるということです。なので、こういうケースにはこういう手法でも大丈夫だけれども、こういうときにはこういう手法を使わないと駄目ですよということを言っているだけで、これが優れていてこれが優れていないという比較を行なっているわけではないということです。

では、それぞれの手法がどういった問題に適しているのかということを考えていく上で、24 ページの図 1-4、環境に関する問題をどのように考えればいいのかということで、3つの分野に分けています。横軸が複雑さの程度。どれほど事態が複雑なのか。関係者の多さであるとか、物事の難しさとか、そういうことですね。縦軸がコンフリクトの激しさ。どのくらい反発が大きいかということです。この軸を取ったときに、様々な環境問題がどういう場所に位置するのかが示されています。

こうしてみたときに、3つの分野に分けることができますというのが Renn らの主張です。一番下が、「知識と専門性が大切なもの」。真ん中が、「プロセスへの参加が大切なもの」。一番上が、「広い視野と価値観が大切なもの」。一番下の「知識と専門性が大切なもの」というのは、参加者がしっかり知識を持って、情報を持って、専門的な話を含めて議論していけば解決するであろう問題ということになります。真ん中の分野は、知識と専門性だけでは十分ではなく、プロセスへの参加が大切になってくる。つまり、市民が意思決定のプロセスに最初からしっかり参加して、その参加の妥当性がしっかり確保されていることが解決への糸口ではないか、ということです。一番上は、プロセスへの参加の妥当性でもはや解決しない問題です。これをどうやったら解決していけるかという、問題の根本がどこにあるのか。社会観であるとか、価値観であるとか、そういう広いところでのずれが問題の原因である、というコンセンサスを持つことが必要になってくる問題であると。このように3つに分類できるということを述べています。

先ほどまでに紹介してきた8つの事例が、この3つの分野のどこに当てはまるのかを示しているのが、図 1-5 になります。事例を紹介していないので、これを見ても難しいかもしれないのですが、事例ごとにコンフリクトの激しさと複雑さの程度を見て、適切な手法を取ることが大切だということがここで述べられています。

ということで、ここまでが Renn らの本をまとめたところになります。

次が、本プロジェクトの位置づけということで、福島以後の市民参加を見ていくものになります。

福島以後の市民参加を見るにあたって、震災以後に国が行なった市民参加型手法のひと

つということで、討論型世論調査に関する報告書をまとめています。報告書自体が分厚いもので、それを簡単にまとめてしまっているのですけれども、27 ページの下の2つがポイントになると思います。他の国民的議論のための取組みとの最大の違いは、(1) 無作為抽出を基本とした参加者を募ることにある。普通の国民の意見を聞くことが可能になるし、代表性を維持しながら討論フォーラムへの参加を募ることで「社会の縮図」を確保できること。(2) 専門家の意見をもとに作成されたバランスのとれた資料を読んだ上で、他の参加者との議論や専門家との質疑等の過程を経て、十分な情報と熟考に基づく意見を聴取できることの2つであると考えている。

これが討論型世論調査の報告書に述べられている点なのですが、今回フォーラムを行なうにあたって非常に重要になってくるのは、2つ目のところで、「過程を経て、十分な情報と熟考に基づく意見を聴取できる」と述べられているのですが、報告書を見ると、統計的な情報に重きを置いている報告書になっています。その理由としましては、「なお、調査結果は全て、統計的な情報によって述べられている。この理由として、実行委員会は、『態度変容の方向は、討論型世論調査のデータではかなり克明に追うことができる。しかし、その変容の原因を特定化するのは難しい』と述べている」。変容の原因を考えていこうというのが今回のフォーラムの目的になっているところなので、ここの差別化を、この後の課題の設定というところで述べていくこととなります。

次は討論型世論調査に対する評価なのですが、個別の評価はおいておいて、大きな問題が2つあって、1つ目が時間が足りなかったということです。

2つ目の問題が非常に重要になるかと思えます。29 ページの下に書かれていますが、「もうひとつの大きな問題は、主催者である政府が結果の使用方法をあらかじめ明示しないまま、本調査が実施されてしまったことである。本調査の結果は、国民投票制度などとは異なり、それ自体が政策決定に直結するものではなく、あくまでも政策決定に際して参照されるべきひとつの重要な根拠を提供するものにすぎない」。何のために行なうかという目的を政府が明示しなかったため、誤解が生じた可能性があるということで、目的をしっかりと明示する必要があるということが述べられています。

これを受けて、30 ページの2. 1. 3. 2から、福島事故後の原子力に関するコミュニケーション・フィールドの課題がどういうところにあるのかということをもとめてみます。

ここでは、課題を2つ設定しています。1つ目が、従来型の情報に偏りがあるコミュニケーション・フィールドの限界。今までのコミュニケーション・フィールドというのは、専門家から参加者へ、情報が一方に流れるものがメインだった。福島事故以降は、原子力に関するコミュニケーションというのは、そういった一方の情報提供型のものでは意味をなさなくなったというのが1つ目の課題になっています。

2つ目の課題が、コミュニケーション・フィールドの公平性に対する不信。ここは、載せ

るかどうか悩んだのですけれども、先ほどの討論型世論調査は目的の明示がされていないということで、政府が使いたいように使うためにやったのではないか、そういったところの不信が広がっていると。なので、調査結果の使用の目的というところをしっかりと見ていかないといけないのではないかとというのが課題の2つ目になります。

これを受けて、本プロジェクトの意義と目的なのですけれども、まず、先ほどの課題の1つ目に対してどのような解決手法を持ってくるかということで、先ほど大石さんが述べられていたような、双方向のコミュニケーションによる相互作用を求めるようなコミュニケーション・フィールドを設定していくというところが、意義の1つ目になっています。こういうコミュニケーション・フィールドは、研究として見たときに、今まででなされていなかったというところがポイントとして挙げられます。

次に、課題の2つ目のコミュニケーション・フィールドの公平性に対する不信というところに対して、どのような解決手段を持ってくるかというところに意義の2つ目を述べています。先ほど言いましたように、コミュニケーション・フィールドの目的が明確にされていないということが課題だったのですけれども、では目的を明確にすれば公平性の不信がぬぐえるかという、先ほどの討論型世論調査で見たように、統計的な結果であるとか、いわゆる結果に重きをおいたような報告を出すと、そこに目がいってしまって、不信感をぬぐえないのではないかとここを述べています。

そこで、今回のフォーラムは何が違うかという、結果に重きを置くというよりも、変容の過程をしっかりと見ていくことに重きを置くことによって、また違った見方ができるのではないかと。不信が解決されるのではないかと。これが2つ目の意義になります。

この2つの課題の解決というところを意義として、目的は軽く述べています。「原子カムラ」をテーマにして、「原子カムラ」を越えるための条件などを明らかにしていくことが目的になっているということです。ここは先ほどの大石さんの説明で詳しく述べられていたと思います。

これを受けまして、2. 1. 4で、どのように設計していくのかということが簡単に述べられています。これは第1回全体会で話したところなので、省かせていただきたいと思います。

ということで、既往のコミュニケーション・フィールドの関連研究整理の説明は以上です。ご質問、ご指摘等ありましたら、お願いします。

(木村^浩) ありがとうございます。それでは、何かコメントがありましたら。

—— 今回のフォーラムは、資料の4ページにあるコミュニケーション・フィールドの分類の中で、当てはまるものがあると考えられるのですか。

(竹中) 当てはまるものは、ないです。

—— ないと考える。まったく新しいところだと。入れるとしたら、一番右側に入れるのですか。

(竹中) いや、これは入れ方が難しいのですけれど…。

—— コンセンサスはなくていいわけですよ。

(竹中) コンセンサスはなくていいのですけれども、「参加」は必要です。

そういうタイプのフィールドは、今までにはない。今までは、「参加」する以上、やはり結果（コンセンサス）を出さないと意味がないと考えられていましたから。

—— この表に、我々が設定しているものを表現したいですね。

(木村^浩) 「参加・協働・権限移譲」という項目について、権限移譲は抜いて、「参加・共同」のセルを少し伸ばして、「コンセンサスはいらない」のところに1つ枠を作れば。

—— 参加・協働があって、しかもコンセンサスは要らないという新しいジャンルをそこに設定すると。

—— 間に入れるのですね。

—— 間ですね。図1-2の元の絵があって、間に入れた新しい絵を持ってきて、比較すると分かりやすいかもしれない。

	情報提供		意見聴取		参加・協働・権限移譲	
目的	興味を持ってもらう	欲しい情報を届ける	自主的な意見表明を促す	出てこない意見を聞く	認識を共有する	共同して、創出する
事例	サイエンス・カフェ	市民ジャーナリズム	公聴会	フォーカス・グループ	コンセンサス会議	シナリオ・ワークショップ



コンセンサスはいらない

コンセンサスが欲しい

	情報提供		意見聴取		参加・協働	
目的	興味を持ってもらう	欲しい情報を届ける	自主的な意見表明を促す	出てこない意見を聞く		認識を共有する 共同して、創出する
事例	サイエンス・カフェ	市民ジャーナリズム	公聴会	フォーカス・グループ	フォーラム	コンセンサス会議 シナリオ・ワークショップ



コンセンサスはいらない

コンセンサスが欲しい

—— 私自身解が見つかっていない中で意見を言うのはためらうところがあるのですが、今言わないといつ言うんだというのもあるので申し上げます。コミュニケーション・フィールドの設計にもバックするコメントになります。

この研究は、まとめ方が難しいなと最初は思っていたのですが、よくよくこの研究の目的と照らしてみると、心の中で起きた変化をどうやって捕まえるか、というところが決定的に重要になるのだらうなと思います。特に、市民側の。

例えば、市民の頭の中に、こういう反応が出てくる。「なんだ、この人たち（専門家）はこういうことを考えていたのか。駄目だな」。こういう考えは、言葉にしづらいのだけれども、コミュニケーションをとった結果、頭の中には確実にあるはずなのですよ。

仮説的にいくつかそういう投げかけはできると思います。例えば、原子力のコストに関する問題は、前提の立て方が全然違う。推進派の人は安く見積もり、反対派の人はべらぼうに高く見積もるみたいな。そういう認識のギャップがあるときに、フォーラムの中で、「あなたはそうお考えですか。私は違うように思うんですよ」と発話されれば分かります。でも、発話されない認識の変化をどうやって捕まえるのかな。ここは面白いところです。

討論型世論調査のときには、終了後に参加者に書かせるという方法をとっていました。でも、統一的な処理のほうに意識がいていたので、自由記述欄を作っていなかったのですよ。そういう感情的な変化というのは取らないという割り切りをしてしまった。もったいないなと思うのですけど。

今回は、コミュニケーションをとった結果、どういう意識変化が起きたのかということをつまめることが非常に大切だと思います。例えば、後で個別でインタビューをしたら、話し合いの中で参与観察をして、表情が曇ったとか。いろいろな情報を取りに行く姿勢が

大切だと感じます。つまり、話し合っただけでポストイットで貼られた内容だけに成果をフォーカスすると、非常にもったいないという気がするのですよ。

どのようにそれを捕まえるかという方法論は、フォーラムを実施する中で深まっていくのかもしれませんが、そういう問題意識を持つ必要があるのかなという気はします。

特に、相当の信頼関係ができないと、「ムラの人こんなバカなことを考えているのか」みたいなことは、思ったよりも発言しにくいのですよ。という話です。

(竹中) おっしゃる通りだと思います。インタビューを実際に行なうということは決定しています。

(木村^浩) 各回のアンケートがありますけれども、基本は自由記述主体ですね。そうでないとそういうことが書けないし、面と向かっても言えないし。

あと、まず記録から言っておくと、フォーラムの記録は全部とるのですね。ただ、参与観察手法は、確かに考えたほうがいいかもしれない。私たちはファシリテーションをしないから、参与観察はできるのですよね。それは少し考える意味がありますね。

それと、各回に全部記述アンケートはやった上で、さらに、記録は全部書き起こしをするのですね。録音して、誰が何を話したのかまでチェックできるようにした上で、それで、フォーラムが終わった後に、インタビューを個別にしていくと。記録やアンケートと照らし合わせながら、このときはどうでしたか、あとは、ナラティブ的な語りでいろいろ話してもらおう。かなり丁寧に取っ払いという設計をしています。というか、それをやらないと意味がないと思っています。

—— あとは、事例の紹介ですが、DPを藤沢でやったときは、町の経営がどうあるべきかみたいな話だったのです。広くいうと、市、政府の役割が、大きい政府がいいのですか、小さい政府がいいのですか、というメインの問いかけを市民に考えてもらう。具体的なイシューとしては、高齢化、少子化、街づくり、みたいなところで聞いていったのですね。なので、いつも、市役所が自分たちで知恵を出して何かやってくれみたいな、ある種の主張、もしくは事実記述があって、それに対するコメントという形で意見を述べ合う。どちらがいいかという議論ではなくて、皆さんどう思いますかとやって、専門家、もしくは市から情報を追加して、聞いていくという形でした。

どうしても、意見を言うというのは難しく、質問するのですね。これが分からないけどどうしたらいいですか。ですから、何らかの問いかけがあると意見は結構出てきやすいという話です。

とすると、今回最初の段階で心配なのは、「原子カムラ」というところが、よく考えたらムラとそうでない人が最初から分かった建てつけで始まっているのですよね。でも、その場に来ていない原子カムラの人というのもあるわけで、そこをどのように気づいてもらう

かなというのは、最初の問題提起の仕掛けのところで一工夫できそうな気はするのです。

いろいろな文脈で、原子カムラという言葉がどのように使われているのかという素材を見せるだけでもいいかもしれない。皆さんの頭の中には、「原子カムラ」が、認識のネットワークだけではなくて、おそらくは利害関係のネットワークで、原子力推進をしたい人々の集まりだ。おそらくそこには国策と結託して、みたいなものがある。ディスカッションペーパーとはいいませんけれども、そういう口火の切り方はあっていいのかなと。

長時間かけて話し合っ、出てきた中で、待つというのもひとつの手なのですが、やたらと時間がかかるのですよね。

(木村^浩) こちらから「原子カムラ」像を出してしまうのは、危ないと思っています。

私は別件でインタビューをしているのですが、はっきりいって、ほとんどの人は「原子カムラ」を知らないんですよ。

だから、土田先生が先ほどおっしゃいましたけれども、原子カムラというのは一部のマスメディアと我々が勝手に作っている自分たちの中での認識構造であって、一般の人たちはほとんど原子カムラを知らない。ただ、今回参加してこようという人たちは知っているかもしれませんが。

インタビューで聞いてみると、「東海村のことですか」「ああ、聞いたことがあります。原子力って地方に作るから、そこの村のことですよ」。我々が思っているムラとは全然違うものとして相手は認識していたりするのです。

こちらが先に情報を提供すると、それが出てこない。その中で、「何のことを言っているの？」という戸惑いみたいなものも実はダイアログとしては面白いのかなと思っています。ですから、最初は、ムラと聞いたときに思うイメージを書き出してください、というスタイルで計画していて、その共有だけで1回分終わりそうですね、みたいな議論をしていたのですね。

—— それはよく分かります。おそらくそういうアプローチも重要なのだろうと思います。

だとすると、別の方法論を立てて、マスコミなどのいろいろな主張の中で出てくる「原子カムラ」というのは、実はある種の価値判断を伴った物言いをしているという事実と照らし合わせると、概念として面白くなるのかなという気がしました。だとすると、ここから出た情報が、その対置のために必要な情報源なんだな、という理解は今しています。

(木村^浩) ですから、今竹中君にこのプロジェクト内でもいろいろ調べてもらっています。どうしてムラという言葉が作られていったのか、みたいなことは研究しても面白いテーマだね、と言って押し付けているわけですけど(笑)。

それはこのプロジェクト内ではなかなか分析は難しい枠組みなのですが、別のプロジェクトをちゃんと立ててやっていると、面白いことは言えそうだなという気はしてい

ます。フォーラム検討会議の中で、新聞記事の中で「原子カムラ」という言葉がどのように使われていたか、なども竹中君にざっと調べてもらって、我々の中で議論をしましたがけれども、結構面白かったですからね。そういうところはもう少し研究としてちゃんと作っていてもいいのかなとは思っています。

私から 1 点いいですか。討論型世論調査に関してですが、最初に 1000~3000 人無作為抽出し、その中から 200~300 名が参加というときに、この参加している人たちのバランスがどうなっていたのかが気になっています。

というのは、私は別件で広域処理に関する調査に少しコミットしたことがあります。その中で、広域処理に賛成か反対かを分けて、分けた人たちがどういう情報行動をとるのか、というのを見てみたのです。そうすると、賛成派の人がどういうところから情報を得るかという、新聞、テレビがほとんどで、他のところからはほとんど取らない。反対派は、新聞、テレビからも取るのだけれども、SNS とか、そういう新しいソーシャルメディアからかなり取ってくる。真ん中くらいの人たちは、どこからも取らない。まず情報獲得源として、そういう情報が出てきたということ。

あとは、意思決定みたいところにどうコミットしていきたいですか、と聞いてみたら、賛成している人たちは、特にコミットしたいと思わない。情報はほしいです。以上。反対派の人たちは、情報がほしいです。今の政策にコミットしたいです。変えていきたいです、というところが強いのですね。

だから、いわゆる政府が主導しているようなタイプの説明会には、反対派の人たちはむしろ行きたくない。まあ、賛成派の人たちもあまり行きたくないのですけど。でも、反対派の人たちは、何か政府の意思決定に対して抗するような、そこに対して意見を言って変えていけるだけの力を持つような取り組みには積極的に参加していきたいと思っている。真ん中の人たちは何もしたくないという人たちです。

というのが見えてきたときに、今回の DP は、あらかじめどうやって使用するか明示しないままやられてしまったという問題があった。これが逆に言うと、国民投票的なものとして、今後のエネルギー政策はこれで決まる、ぐらいつもりで参加している人たちが集まっているのであれば、反対するために、今の規定路線を変えていくことを積極的にやりたいがために参加しているという可能性がありうるのではないかと思ったのです。だとすれば、初期のバランスがそもそも一般とずれた状態で始まって、さらにそこで情報を收拾していくにつれ、その意識を高めていって、結果として、100%原子力反対という構図に陥ったというような分析ができてしまうのではないか。その辺についてはどうですか。

(竹中) もう少し詳しく調べないと分からないんですけども。

—— 検証委員会が最低限そこは検証しているはずですが。方法論的にもそれがあると言われてしまうので、そこだけは徹底的に防御します。一定の考えの人たちが集まってくると

まずいので、本当に分散するように、「来てください」と。来たい人たちではなくて、来てほしい人を招くという形でやっているはずです。それを今回の検証委員会がどうやっているかという話で、一義的にはそれを見れば分かると思います。サンプリングプロセスに対して何らかの記述があるので、それを見ればいいと思います。

むしろ今回面白いのは、今おっしゃっていただいた通り、政府が原発比率0なのか30なのかを決める重要な材料にします、という言い方にして、どこまで結果にコミットするかを言わないままこの調査を始めたので、やらされているほうもたまんないし、やっているほうも自分たちの意見がどう反映されるか分からないままやったところが、29ページの下に書いてある文章の遠回しな主張なのでしょう。

これはどの調査にも言えることなので、教訓はおそらく我々に対してもあって、何のためにやっているの、という話はフェアにやっていきましょうという一般的な教訓としてこれは読んでいます。これは私の感想です。

(竹中) そのプロセスをしっかりと調べないといけないなと思います。

参加者の選抜に対して、検証委員会のほうは、代表性の意味を明確にすべきであるということを課題として述べています。この内容がどういうことなのかということまで私の調査が追いついていなくて申し訳ないのですが、こういう課題が述べられている以上、この200~300名の選び方がどう妥当なのかということは見えていかないとはいえないと思っています。

(木村_浩) ちなみに、この討論フォーラムというのは、2日間行われたと。

(竹中) 2日間ですね。

(木村_浩) だから、フォーラムも2日間くらいじゃないと来ないのかな。その辺も気になっていて。もう少しこの辺の細かい話が参照できるようになっているといいかなという気がしました。

あとは、報告書の内容に関するような話なんだけど、26ページの「ドイツのモデル」というのは、その前の部分に書いてありますか。

(竹中) いや、ドイツのモデルというのは、15ページのVarresbecker Bachのことなのですが。オランダのモデルは、以下オランダの事例と書いていますね。統一感がないので、直します。

(木村_浩) 日本語と英語が混在しているのと、あとは英語だけだとそもそもついていけないから、頑張って日本語化を図ってください。ここは研究者もいるのだけれども、その中

に市民の方もいてもらって、一緒に進めているというところがひとつの重要なポイントなので、そこは頑張ってもらいたいと思います。

あと、私が思っているのは、従来型のコミュニケーション・フィールドというのは、市民参加と言っているのだけど、本当のところは市民参加&専門家不在だと思います。少なくともコミュニケーションにおいて、専門家が自分たちの意思を変えようとする努力がない。そういう取り組みでしかない。

コミュニケーションというのは Two-Way であって、自分たちが変わる意思がなければコミュニケーションなんて取れませんよということは、1990年代くらいからこういう取り組みのときにはいわれているのにも関わらず、これだけ取り組みをやってきながら、市民参加といいながら、専門家がまったく参加していないというこの現状に私は一番大きな問題点を感じているので、そこをうまく表現できないですか。というか、そういう観点に関してはどうでしたか。

(竹中) 参加していないというのは。

(木村^浩) 枠組みには参加しているのだけれども、「コミュニケーション」に参加していない。ともすれば自分たちの意見を変えていくつもりがあるかということ、ないのだろうと思うのです。それを積極的に前面に出していくような参加のあり方はないのかな、というのが、今回のフォーラムのひとつの目的でもあるので。

(竹中) それはその通りだと思うのですが、今までの研究を見て、専門家が情報提供だけして、コミュニケーションには参加していないということは言えると思います。でも、専門家が意思を変えるようなつもりがないとか、そういうところに関しては、今までの研究から言えるかということ、そもそも参加していないところがあるので、専門家がどのように考えているのかまで言っているのかどうかは分からないですね。

(土田) そこは、専門家のほうは、コミュニケーションでどうなるかというようなところで考えていないわけですよ。市民と話し合ったからといって、1ミリシーベルトの危険性について認識を変えるということはありません。さらに、原子力発電所が有用かどうかということも、おそらく市民と話し合ってもそんなに変わらない。それから、原子力発電を推進すべきかどうかということも、おそらく変わらない。変わらないものだから、参加していないということになってしまう。

もし変わるということを使うのであれば、会議が始まる前に話題になったのですけれども、例えば東洋町で失敗した原因は何かというのは、科学的知見が浸透しなかったわけではなくて、もっと別のところにあったわけで、そこに気づくかどうかという変わり方だと思います。科学的知見だけで世の中は動いていないということに専門家が気付くかどうか。

—— もっと簡単に言えば、専門家は、10 万年先に 1 ミリシーベルトとか、そういう説明をするわけです。一般の人は、10 万年後はどうでもいい。10 年後、20 年後の自分たちの生活環境にどういうインパクトがあるのですか。あるいは、自分の子供たちや孫たちにどうという影響があるんですか、ということを知りたい。10 万年後はどうでもいい。

ところが、今の専門家の説明シナリオには、そういうところの説明シナリオがまったく用意されていない。だから、全然かみあっていない。かみあっていないから変わりようもない。

専門家側の誤りは、一般の人たちが関心を持っているところに対する説明のシナリオを持っていないこと。それから、聞き手の側からすれば、専門家が言っていることが自分たちの関心とずれているから、自分たちが関心を持っているところに対する要求をもっときちんと明示すべきだったのではないか。

東洋町の事例と、最近出された学術会議の提言のギャップに私はいつも驚いていまして。東洋町では、今言ったようなすれ違いが非常に大きくて、まったく会話になっていなかった。だから田嶋町長はまったく太刀打ちできなくて負けた。ところが、その後専門家集団が分析して出している話は、学術的に 10 万年先のシナリオをもっとコンクリートにしないと駄目だというような話を一生懸命している。だけど、そんな議論は東陽町ではただの 1 回もなされていないということに、専門家の人たちは気がついていないのか、知っていてあえてそういう言い方をしているのか。

だから私は、専門家集団の説明と一般の人たちの関心とに大きなすれ違いがあって、専門家集団としては、きちんとしたかみあう説明のシナリオを作らないといけないと思っているわけです。そのかみあう説明のシナリオをこれから構築していくべきだと私は思うのだけれども、そこに対する非常に大きな提言がフォーラムから生まれるのではないかと期待しています。

そうやって初めて、先ほど木村先生が言われたフィードバックが達成されるわけです。フィードバックがかかるようなリスクコミュニケーションでなければ駄目だということと言われて久しいのだけれども、いまだかつてこれだけのフィードバックがありましたという成果物を見たことがない。それを、おそらくこのフォーラムから初めて生まれるような気が、私の期待感があって、それができたら大変大きな成果になるのではないかという気がしますね。

(竹中) そうすると、専門家がそれに気づいていくというところに大きな意義があるので、それを報告書に載せないといけませんね。

—— そう。専門家の意識の変容も非常に関心があるし。

それから、一般の人たちがそういうことに対するチャレンジをする、先ほどおっしゃっ

たように、「なんだ、こんなことしか考えていないのか」、どんどんそういう意見を出さないと、専門家の気づきが出ないのですね。だから、このコミュニケーション・フィールドで、それをいかに引っ張り出すか。それが非常に重要な課題のような気がしますね。

—— ご参考までに。今年ではなくて来年の方法論に近いかもしれないですけども。オンカロの映画がありましたよね（「10 万年後の安全」）。比較的関心のある人とそうでない人を集めて、映画を見て、感想を語る会をやったのですよ。それを全部テキストで取って、後でチェックしたのですけれども。

同じ話が言えるかもしれません。今までの専門家が知らない人々を教育しようというアプローチだけではなくて、専門家にとっても客観的に見れる素材があると、同じ素材を専門家はこう感じた。でも一般人はこう感じた。お互いに理解している、理解していない点が違うということが分かる。何かニュートラルな素材を双方が見るようなことができる面白いかと思います。

今年間に合うとは思っていません。来年、今年の結果を踏まえて、そういうしかけもおやりになるといいかもしれない。

ただ、あの映画は、外国ではこうやっている、日本でどうしますかという、その政策の問いかけのためにわざとやった方法論なのですけれども、それはそれで面白かったです。今年のファイディングに基づいて、それに類する方法論を開発することになるのでしょうか。

—— アメリカの原子力学会の会長さんが日本で講演されたときに、非常に興味深い話をされたのですけれども、何かというと、ウランのシリンダーというのは何十トンもあって重たくて、それをトレーラーで輸送しています。それが事故を起こしたときの安全性の評価を、専門家は何をやるかという、周りの放射能が何ミリシーベルトになるとか、ならないとか、そういう説明をするのですね。だけど、一般の人は、そんなことよりも、あの何十トンのタンクが自分の体にぶつかってきたらひとたまりもないと。その危険性のほうが先に知りたいのです。ところが、そんな説明は原子力の専門家は一切してくれませんか。

だから、そういう一般の人が真っ先に心配することをきちんと説明してから放射能の話をするべきではないかと。こういう話をされたことがあって。その会長さんは、地域の説明会では、まずそこから説明しますとおっしゃっていましたね。

—— お話を聞いていて、まったくその通りだと思うのですよ。問題は方法論なのです。専門家が一般の人たちの話に耳を傾けて、謙虚に本当の真意をよく汲み取って、自分の考えが間違っていたら直さないといけない。そういうことであるのですが、これまでの学会会議もさることながら、リスクコミュニケーションというのは 10 年以上いろいろなところで話がされて、そして、特に学問としてはかなり皆さんよくやられているのですが、実現

というのはなかなか思っているようにいかない。ケーススタディとして、こうした、ああしたというのは個々にあるのですけれども、全体としてそういうものが双方に盛り上がってっていないのも事実なのですよね。

それをつくづく考えるに、一般の人たちから言わせると、例えば専門家の人たちの言葉がよく分からないとか、もの考え方が分からないとか、基本的にギャップがすでに存在している。それは一般の人たちのせいではないのです。事実としてそういうことがある。

だから学術会議のいろいろな提言にしろ何にしろ、それはそれで立派なのですけれども、相歩み寄り、双方が理解するような次の段階になかなか進まない。どうすれば進むのか、私はずっといろいろなものを見ていて、そして、自分もコミュニケーションをいろいろやってきたときに、間に立つ技術が必要ではないかと思うのです。昔からモデレーターなどと言われてきた。あるいは、インタープリター。間に入って、そして双方を上手に調整するような人たちが必要ではないか。

大学の先生たちは、大学の中で学生たちに講義をされているときに、決して市民のレベルまで落としたような話はされたことはないと思います。ちゃんと専門的に話をして、学生はついてくるし、それはそれでいいのです。一方、世間の人たちに話すときには、少人数の場合はかなり分かりやすい言葉で話をされたりするのですが、不特定多数のたくさんの人たちの前で話すようなときには、今度は大学の先生という存在感自体を落とすわけにはいかないから、やはりしかるべき正確性を追求してお話をされるのですよ。これはやむを得ないと思うのです。噛み砕きすぎると、あの先生は先生らしくないと思われるかもしれないので。その辺のギャップがあるなと私は思いました。

だから、そういう場合に専門家として私たちはどうしたらいいのかといたら、もちろん私たちも分かってもらおうとするのですけれども、間に立つような人たちをこれからどう育てていくか、そういうことが大切なのではないのでしょうか。

—— 今のお話は、もう何年も前のレベルの話で、今このフォーラムで目指しているのは、全然違うと思いますよ。今お話になっているのは、要するにインタープリターのことで、自分たちが一生懸命安全だと言っているのに分かってくれない。そこを分かってもらうようにする。そういうレベルの話だけでも、ここで目指しているのはそうではないですよ。私が申し上げているのは、10 万年先の安全性の話なんか、いくら説明してもすれ違いですよ。そうでないところの説明をしなければ駄目ですよということを私は感じています。

—— その通りなのです。私もそう思っているのです。

—— ですから、インタープリターの問題ではないと思っています。インタープリターの問題ではなくて、説明シナリオがとっくに破綻をしていると私は思っています。

—— 破綻するときに、専門家の人たちは、これまでと同じような言葉の使い方や接し方では、もはやいかないのですよね。

(木村^浩) その辺りに関しては、もう調べてあるのですよ。それこそ、Habermas の議論をしていて、そういうことを踏まえて、資料 4-5「コミュニケーション・マニュアル」を作ってきているのですね。

だから、インタープリターがどうか、分かりやすく言えばどうかという話はもう我々の中では終わりで。

こういう内容は分かりやすく話す。こういう内容は科学的に話す。こういう内容は社会の公平性で話す。感情の話はどう話すか。そうやってちゃんと仕分けて話していけるような人を、専門家も市民も増やしていかないと駄目なのではないか、というのが、コンピテンスの話です。

—— それは私も同感なのです。そういうふうになっているかどうか、ちょっと心配だったので。

(木村^浩) なっていないと思います。だって、難しいですよ。おそらく、専門家が一番できていない。

(土田) そこでしょうね。通訳さんがいてくれるから向こうの言葉を覚えなくてもいい、というのを取り払いましょうというのが、このフォーラムの目的だと思うのですよ。

(木村^浩) それは、大きな目的のひとつです。だから、難しい話題でもあえて難しいままいくし。ちゃんと正確に話さないといけない話題があるんだ、というのがひとつの気づきになっていかななくてはいけなくて。当然、専門家も、最初から難しく話したら意味がないんだという気づきが絶対必要です。自分たちが科学的な判断だと思っていたものが、実は科学ではないという気づきは、それこそ土田先生の話ですよ。そういう気づきも必要です。それから、情報を受ける側としても、分かりやすさだけ求めていたらこの議論は成立しないんだ、ということに気づいていく。そういう時期になってきたのか、そういうことをできるかどうかというのを、ある意味ではやりたいわけです。

—— 10 万年先の安全性を確保したシステムになっているかもしれないけど、もっと身近な、現世代、あるいは孫の世代が活着している間にもっと安全にしてほしい。その安全性を担保するために、今のシステムを変えてほしい。そのくらいのことがこのフォーラムの成果として提言できれば理想だと思います。要するに、やっているほうの人たちが何にも変える気がなくて会話なんてするんだったら、来てもらいたくない。だから、変えるんだと。

変える気があるから会話をするんだと。この会話に参加する専門家の人たちは、そのくらいの志を持って参加するべきだと思いますよ。

—— 私もそう思います。素晴らしいと思う。そして、そのことは学会員の人たちにできるだけアピールするべきだと思います。こういうやり方があるよということを強く言う。ありがとうございます。よく理解できました。

(竹中) 報告書のほうの話になって申し訳ないのですが、今話をしていたときに、課題は、ずれがあることではなくて、ずれに気づいていないこと、にしてよろしいですか。

(木村_浩) ずれがあることは原因のひとつであって、問題はずれに気づいていないことでしょう。だから、原因と問題点をちゃんと分けておかないといけなくて、全部問題点だと思ったら駄目なのです。今ある現象で何が悪いのかということを明確にし、その悪いことがなぜ起きているかという原因を特定して、その中でどうしたらいいかという話をしなければいけないので。そこがまだ、原因と問題点がごっちゃになっている。

(竹中) ずれに気づいていないという課題を報告書に書くにあたって、それを客観的に確認できるような事実を載せていかないといけないと思うのです。そのひとつの結果が社会調査の原子カムラに関する認識のところにあると思うのですが、それ以外に何かそういう事例があったら教えていただきたい、ということがひとつですね。

(土田) それはまだデータがないでしょうね。先ほど、調査をやるときに数量ではなくて自由記述だという意見があったでしょう。まさにそこに現れているのですよ。どこが正か分からない。分かっていたら、スケールで測ることができるわけですよ。気づいていないようなことはスケールに乗らないので、もう定性的な測定しかできない。

(木村_浩) もしかしたら、ずれがないけどずれがあると思っ込んでいただけかもしれないですからね。

(土田) それもある。

(木村_浩) だから、分からないのですよ。

(土田) 測定に関しては、結構リスクですよ。心の中で思っていて言わないだけだったら聞き出すことはできますけど、本人も気づいていない場合があるので。

—— ただ、それは、今回のフォーラムで、人と人が話をするのを見ていて気がつくということがありますよね。むしろそのほうが多いのではないかと思います。

(土田) ひょっとすると、オブザーバーで見ている我々が気づくかもしれない。

—— だから参与観察は絶対にいると思うのですよ。

—— 予備フォーラムでもいくつか気づきがありましたからね。たぶん、たくさん出てくるような気がしますよね。

(木村_浩) まさに、参与観察も踏まえてやらないといけませんね。人員が足りないな。

報告書の内容に関する議論は、後でやりましょう。ここで始めると終わらなくなるし、データも探さないといけないし、データがなかったら、論理的に組み立てて仮説を立てて、その仮説を検証するというを本当はやらないといけないので。そこは後でやりましょう。

—— 表情の変化を捉えるべきだというご指摘は非常に興味深いですね。

(木村_浩) 前に、全部ビデオに撮って、やったことがあるんですけども。ここで沈黙とか、にやりと笑うとかまで全部書いてもらったことがありますけど、記録を作るのが大変だったそうです。

それから、画像を撮らないといけないので。まあ、その場で書けるだけ書くという方法もありなのですけれども。画像を撮るのは怖いなと思っているところはあつて。

—— 表情の変化を捉えて、ファシリテーターの人が意見にして引き出せるといいのですがね。何かご意見がありそうですね、とか。

—— 黙ってみている人とか。

(木村_浩) 首をかしげているけれど、発言はしないとか。結構いるのですよね。

—— テレビのキャスターが、そのポーズで、相当なメッセージを視聴者に伝えているということはよく言われていますよね。ゲストがしゃべっていて、ちょっと首を傾げるだけで重大なメッセージが視聴者に伝わると。

—— これは半分ふざけているようですが、半分真面目なのですけれど、ニコニコ動画がありますよね。そのコメントを分析するという方法が今流行りつつあります。ノイズばかり書かれるのですけれども、意味のある人がコメントとして書くんだっただらば、その場に対してどういうことが起きているか。つまり、テキストに落とすだけではなくて、まさしくリアルタイムでそれができる設えができてきたなというのは、最近つとに感じるところです。このフォーラムをニコ動に流せとは絶対に言っていません。

(木村_浩) いや、それはとてもできないですけど。

私はニコニコ動画には生出演したことがあります(ニコ生)。出演者の前にも画面があるのですよ。そちらは2秒くらい遅れているんですが、コメントも見えるのですよね。まあ、そんなのは脱線ですけど。

では、ここで5分くらい休憩をして、その後少し残った部分をやっていきたいと思いません。では、少し休憩を取ります。

(休憩)

(木村_浩) それでは、再開いたします。コミュニケーション・マニュアルは、何か話すことがありますか。特に変わっていないですけども。

(竹中) 特にありません。

—— これがほぼ最終バージョンと置いていいですか。

(木村_浩) これは、とりあえず今年度版の最終バージョンぐらいに考えていただければと思います。もうほとんど変わらないと思いますので。

—— これは報告書の中に入るわけですか。

(木村_浩) はい。付録として入れます。

—— これだけで独立してもいいくらいですよ。いろいろ利用価値があると思います。

(木村_浩) はい。完成したら、ウェブ公開しようと思いますので、ぜひご活用いただければと思います。

最後に来年度の計画になりますが、その前に、今まで話し合っていたことを中心に、報告書をまとめています。最初にも言いましたが、4月19日にドラフトを提出して、岩田先

生のチェックが入って、OKが出れば、最終版を5月30日に提出をするという手続きになっています。その前に皆さんには共有できると思いますので、よろしくお願いします。

3. 平成25年度の計画等

(木村^浩) では、最後の議題に入りたいと思います。来年度の計画ということで、資料を2つ用意させていただいています。4-7と4-8になります。では、4-7から簡単にご説明していきたいと思います。

(スライド2) スライド2に、実施内容全体の概要が書いてあります。これは応募のときに書いたものを、ほぼそのまま持ってきています。

目的は、今までずっと議論になっていたものなので、省略します。

実際に何をやるのかということですね。1. 市民と専門家に対する社会調査を実施し、

2. これをベースとしたコミュニケーション・フィールド（フォーラム）を構築し、

3. フォーラムを実施する。

4. フォーラム参加者への継続的な調査を実施し、市民はもちろん、専門家側の意見形成（意見変容）プロセスをも同時に見ることができ、コミュニケーションによる市民と専門家の相互作用をダイナミックに捉える。

5. これを2サイクル実施して、より実践的な方法論を開発する。1サイクル目は予備実験的な位置づけであるとしています。

太字で書いてある部分が、25年度に実施する内容になります。

(スライド3) これを表の形にしたのがスライド3になります。原子力学会に再委託して実施している社会調査の部分が(A)です。コミュニケーション・フィールド施行の部分が(B)ということになります。

今年度は白抜きの部分を行ないました。社会調査およびフォーラムの設計。市民および専門家への社会調査・分析。フォーラムメンバーの選択。メンバーの選択はまだ実施中ではありますけれども、以上が今年度の仕事として終わったということになります。

次年度は、まずフォーラムが5回あります。時期は2013年の5月から7月。シンポジウムが1回、2013年8月に計画をしています。

このフォーラムの実施と同時に、「フォーラムメンバーに対するアンケート調査・分析」が、原子力学会のほうで行われます。2013年5月から7月、毎フォーラム後に実施して、比較分析ができるようにしておくということ。そして、フォーラムが終わった後になりますけれども、「フォーラムメンバーへのインタビューに基づく効果測定」、これが2013年8月から10月。20名いますので、それなりに時間がかかるかなと思っています。

これが終わった後に、フォーラムの発言記録と、アンケートと、インタビューそれぞれを連携をしながら分析をして、「コミュニケーション・フィールドの効果検証」を行う。これが9月10月くらいになります。

これを受けて、Actのところになりますけれども、「コミュニケーション・フィールドの改善案の整理」。これが11月くらいです。あくまで予定ですので、参考までに聞いていただければと思います。

そして、第2サイクルとなりまして、もう一度Plan、「社会調査およびフォーラムの再設計」が12月。Doの社会調査とフォーラムメンバーの選択。ここまでが来年度の内容ということになります。

その後は、もう1回サイクルを回して、最後にまとめに入ることになっていきます。

(スライド4) これを業務計画書のように題目だけ落としたものがスライド4ということ、大きくは(1)フォーラムの施行、(2)フォーラムの効果測定・検証と改善案の整理、(3)フォーラムの再設計、(4)社会調査の実施となっていきます。

こちらの細かい内容が業務計画書(4-8)に書かれていますので、簡単に該当箇所だけ読んでいきたいと思います。

「4. 当該年度における成果の目標及び業務の方法」です。(1)フォーラムの施行。①フォーラムの準備・実施・記録。2012年度に作成した運用マニュアルを活用して、2013年上期に複数回のフォーラムを実施する。運用マニュアルというのは、コミュニケーション・マニュアルと、フォーラム計画書ですね。フォーラムで話し合われたことは記録し、ホームページで公開する。

②一般公開のシンポジウムの準備・実施・記録。全フォーラム終了後、フォーラムに関する一般公開のシンポジウムを実施する。シンポジウムの様子は記録し、ホームページで公開する。

(2)フォーラム参加者への継続的意識調査による効果測定。各回のフォーラムにおいて、アンケート調査を実施し、参加者の意識変容、態度変容、相互信頼の程度、フォーラムへの評価等を測定し、フォーラムの効果を定量的に明らかにする。

(3)フォーラムの再設計。①インタビューとフォーラム記録による効果検証。全フォーラム終了後、参加者にインタビューを実施し、参加者の意識変容、態度変容、相互信頼の程度、フォーラムへの評価等を定性的に明らかにする。

フォーラム記録と併せて分析し、参加者に感じられたフォーラムの効果がいかなるダイナミズムと関係していたかを明らかにする。また、「原子カムラ」の境界を越えられたか

どうかという観点から、フォーラムの効果検証を行う。

②フォーラム改善案の整理と再設計。「原子カムラ」の境界を越えるためのポイントを整理し、現時点で明らかになったコミュニケーション・フィールドの枠組みおよび要件を整理する。同時に、(1) ①で失敗した点についても整理し、改善提案を行う。

これを踏まえて、フォーラムの目的、応募方法、フォーラム参加者選定方法、実施方法、ファシリテーション方法、一般公開シンポジウムについて、再設計を行う。

③フォーラム参加者選定。フォーラム参加者選定方法に則り、参加者を選定する。

(4) 社会調査の実施。①調査項目の再設計。エネルギーや原子力に関する意識を測定する質問項目を再設計する。また、フォーラム参加者を決定するための市民および専門家への調査票および依頼書を、フォーラムの再設計に準じて作成する。

②市民および専門家への社会調査の実施。作成した調査票を用いて、市民の代表として首都圏住民（回収数 500 名規模）、および、専門家の代表として原子力学会員（回収数 500 名規模）に対してアンケート調査を実施し、結果を分析する。また、公正のために、アンケート調査結果の概要はホームページで公開する。

③フォーラム参加者への意識測定項目の再設計。フォーラム参加者のダイナミックな意見・態度・信頼の変化を測定するための項目を見直す。

(5) 情報の共有および成果の取りまとめ。業務推進全体会合によって業務の方向性・進捗を確認し、成果を取りまとめる。また、学会等で情報収集および成果発表を行う。

(6) 外部評価。年度中期・最終の 2 回において外部評価委員会を開催し、業務の適切性、公正性、学術的新規性等を評価する。

ということになっております。実施期間は 4 月 1 日から 3 月 31 日の予定ですが、いつ契約できるのか次第ということになりますね。

これは基本的には契約ということで、あっさりしたものになっていますけれども、これをさらに細かく来年度は議論しながら進めていきたいと思っております。

(スライド 5) では、パワーポイントのほうに戻っていただいて、スライド 5 をお願いします。今年度の体制が書かれています。研究の取りまとめを私が東大で受けて、再委託としては(1)を原子力学会に、(2)をパブリック・アウトリーチに再委託をして、実施するという体制をとっていました。

(スライド 6) 実は、来年度は私が東大を辞めまして、パブリック・アウトリーチに就職をするということです。パブリック・アウトリーチでこの委託業務を受けまして、再委託は原子力学会ということで、構図がシンプルになったかなと思います。東大の原子力とい

う肩書きを持っていると、社会的な公正性に問題がありうると指摘されたこともありましたが、そういうことも踏まえて、パブリック・アウトリーチとして活動するという方向で、次年度以降やっていきたいと思っています。

ここにいるメンバーには、来年度もご協力をお願いをしたいと思っています。

ということで、少し時間がありますので、来年度の方法について、ご意見、確認事項がありましたら、よろしくお願いします。

一応、来年度も原子力学会の中に特別専門委員会を作りまして、実施をしたいと思いません。特別専門委員会ですけれども、先日原子力学会に設立の説明にいきまして、承認をされています。

原子力学会の中でも、こういう社会的な話については力を入れたいということもあって、興味があるようでした。また、連携することにも興味があるらしくて、そういうことの打診も今後考えてほしいと言われていています。本当は説明 10 分、質疑 5 分で 15 分から 20 分くらいで終わるのですが、30 分くらい面白いディスカッションをさせていただきました。原子力学会がすごく興味をもってくれて、非常にいい取り組みであると言われていていますので、次年度以降も、そういう意味でも頑張っていきたいと思っています。

あとは、ここは業務推進全体会合という場ですけれども、ここでも皆さんにまたご協力をいただければと思っていますので、よろしくお願いいたします。

—— 25 年度についてではないのですが、土田先生が、科学的な知見では人が理解できないとおっしゃいましたよね。結局それが今の原子力の全体のことになっているのではないかと気になっているのです。

10 万年先の話をして、今や 30 年 50 年先がどうだろうかということが分からなければ、一般の人は納得できないだろうと。おそらく、廃棄物のこともそうだと思うのですけれども、10 万年先のことなんて、我々の理解の範囲を超えていると思うのですよね。

今回のプロジェクトについても、何か同じような共通の基盤があるような気がするのです。これを解決するにはどうしたらいいですかというのが、この業務のテーマになっているような気がして仕方がないのです。

昨日、日銀新総裁の黒田さんの話で、デフレを打開するために 2% の（物価安定）目標をやると言っているのですけれども、中身が全然何もないのですよね。ただし、説明がとてもうまいのですよね。おそらくメディアトレーニングの訓練を受けたと思うのですが、表情を見て、ああ、この人は信念を持ってやっているなと思いました。

信念とかそういうものが、相手の理解や納得につながるのかなと。Habermas とよく合うのですよ。科学的な情報だけで人は理解しないし、10 万年とかとてつもないところを納得しろといっても無理なので。結局、人の表情とか、説明の意欲とか、信念とか、そういうものが心を打って、この人だったら信用しようかなと思うのではないかと、ということ

今考えていたのです。

だから、今回のフォーラムも、そういうところが大事になってくるのではないかと気がしているのですけれども。いかがですか。

(土田) それは少し危ない議論だと思うのですね。

—— 私もそう思います。あえて言っているのです。

(土田) 確かにそういうことの影響力は強いし、その通りなのですから、ただ、それで流れていくと、結局学問って何だったのという話に行き着いてしまうので、それだけではない、というところだと思いますね。

ひとつ考えたのは、例えば 10 万年後の話が出ていますよね。私がそれを最初に聞いたときに、ホモサピエンスが発生したのは 3 万年前だけだと思ったのです。ひょっとすると、10 万年後はもうホモサピエンスは滅びているかもしれない。あるいは新しい種が出てきているかもしれない。

でも、10 万年後の予測というのは、我々人類（ホモサピエンス）が今と同じ文明の下に生活していることを前提にしているのですよね。だから、理科系の人たちは、仮定がきついのですよ。もしそうだとすればという前提で全部計算しているのだけど、文系の間は何を考えるかという、その前提は崩れないの？ というところなのです。10 万年先が安全だということであれば、1 年後はもっと安全でしょうという発想で来ているのだけど、でも本当にその前提が成り立つの？ というところが問われている。だから、どの前提を疑っているのかということをもっと明らかにしていくことではないかと思うのですけれどもね。

—— まさしくそういうものが明らかになることが重要だと思います。先ほどのオんカロの映画の例でも、実は安全かどうかの前に、盗掘にくる人がいるとか、氷河期が来て、言語を通じない次の人類が出てきたときのためにサインを建てるべきか、もしくは絶対分からないようにするべきか、みたいな議論をしていました。そこまで考えているのか、というのが見て分かるというところが、今回のフィールドでも出てくると面白いですし。

あと、これは補足ですが、実は科学に対するものの見方に、専門家と一般人で差が出てくると面白いなと思っています。実はこれは結果を見てからコメントしようと思っていたのですけれども。次年度に向けて、重要な点だと思うのです。一般の人がサイエンスは白黒をつけてくれるものだと思っている一方で、実際には活断層なのかどうか専門家が議論しても分からないみたいな現実がある。でも、そういうことが実態として明らかになると、科学的な判断以外でも判断しなければいけないんだな、みたいなところが共有されてくる、今回のフォーラムの対話の中で明らかになると、そうだったの、という気づきが出てきそうな気がして、そこは楽しみにしているのです。

—— 私もまったく同感なのです。活断層の話がありましたけれども、何万年、10 万年先とかいわれても、本当に起こるかどうかわからない。それでも判断しなければいけないのですよね。そのときは、科学的な判断だけでは乗り越えられないのではないかと。でも、認めないといけない。それは何だろうか、ということですよ。

そういうことが議論の中で入ると、科学、万能なだけではないものが何かあるということだと思えるのですよね。それがフォーラムで出てくるといいですね。

(土田) やはり、市民の側にどうアプローチするかという発想が強すぎると思うのです。それは大事ではあるのですが。

でも、例えば地震学の人たちが、活断層がどこにあるのかわからない。地震が来ることはかなりの確率で分かるけれども、いつ起こるかはわからない。でも、社会では、何月何日に起こるかということを知りたいわけですね。本音を言えば。でもわからない。その折り合いをつけるときに、どこまでの曖昧さで、どこまで情報を出せば良いのかということが、結局科学者のほうが分かっていない。

だから両極端に行ってしまう。全然わからないですと言うか、私たちに信じてください、起こるんですよと言うか。どちらかしか出さない。そのさじ加減を分かるようになるというのが、おそらく、市民との会話なのです。

(木村_浩) もしかすると、さじ加減がないのかもしれないですけどね。

—— いや、少なくとも幅があるんだということが分かれば、かなりの進歩だと思うのですよ。きっと、どちらも嘘は言っていないのです。でも幅があるのです。

(木村_浩) 幅があるのだけど、その幅というのが、サラサラと入れる砂糖ではなくて、角砂糖みたいになっている。要は、1 個ですか、2 個ですか、0 個ですか、となっている。半分ほしいんですけどと言われても、半分はない、みたいな。結局、そういう答えが出てくるのが科学なので。科学というのは、実は割と離散的な解が出てくるものなのですよ。

(土田) いや、そこが、さっき私が言った、仮定がきつすぎるというところと結構似ているところなのです。

(木村_浩) でも、科学は仮定をしないと答えが出てこないですから。その仮定に基づくとそういう答えが出てくる、そういうものであるということを受けた上で、どう議論していくか、ということなのです。

(土田) 一般の人たちはそれを知らない。

—— そうでしょうね。

—— 私はぜひ元気ネットの方のご意見をお伺いしたいのですが、今までの経験からどう感じるのか。

—— ワークショップに参加している一般の方たちは、高レベル放射性廃棄物のことを初めて聞くような方が多いわけですね。そこでいきなり 10 万年の話をされても、本当に想像も及ばないと思います。

でも、最近では、10 万年先の心配をする必要はないのではないか、という市民もいます。現在とか、せいぜい 20 年 30 年。まして、立地地域の方たちは、私たちの背中に抱えていることのほうがよほど危険なのだから、10 万年先の議論ではなくて、今の議論をしましょうよという意見を言う市民も増えてきた。これはこの 6 年間の変化だと思っています。

—— 知識レベルが上がっていますよね。

—— かなり上がりました。以前だったらなんとなく不安だとか、10 万年というのはごまかされているように思っていたことが、そんなことではなくて、もっと現実的な議論をしましょうよという市民もはるかに増えてきているのです。

(木村_浩) それはありますね。

—— 誰が 10 万年先のことを安全にしてくれと頼んだのよと。こういう感じですよ。

—— そうです。そんなことではなくて、それこそもっと今の安全をちゃんと議論して、今何をすることがこの地域にとって安全なのかの議論をしましょうよという意見がちゃんと出てきている。

—— それは 3.11 以降ですか。

—— もちろんそうです。

—— 世の中の産業施設一般の設計というのは、全部 100 年なのですよね。私は以前道路の設計をしたことがあるのですが、当時の建設省から、100 年降雨で設計してくださいと。過去 100 年の最大の降雨量に対して安全な橋の設計にしてくださいと。

福島事故に関連していうと、土木学会の津波の基準で設計しました。5メートルくらいの設計にして、結果、超えてしまったわけですが、土木学会の設計は、全て100年なのです。100年のレンジで最大の条件を出すというのが土木学会の常識なのです。一方で原子力は、ご存じのように10数万年、最近では40万年といわれていますけれども、で想定しろと言われていたわけですが、原子力学会はそういう前提を説明せずに土木学会に依頼したから、土木学会は常識的な100年で回答しているのですね。

実は、専門家同士でもすれ違いが起きていたということです。そのときに、原子力学会側から「過去15万年で最大の津波を予測してください」とお願いしていたら、また別の答えが返っていたかもしれないと私は思っていましたね。だから、一般の方々とのすれ違いだけではなくて、専門家同士のすれ違いでも、非常に大きな問題があるという気がしています。

最近、よく(旧)丹那トンネルの話が話題にあがります。(旧)丹那トンネルというのは、新幹線の丹那トンネルのすぐわきにあるのですが、あそこには丹那断層という大きな断層がありまして、建設中に大きな地震が起きたのですね。結果、2メートルずれたのですよ。

それで、その横に新幹線の丹那トンネルを作る計画をしている人たちは、どうでしょうか。それで、土木の大家の人がよく調べたら、500年に1回こういう地震が起きます。次に起きるのは500年先ですから、何の心配もありませんということで、新幹線の丹那トンネルは実はそのまままっすぐ通っている。古いトンネルは2メートルつないで、今通っていますけれども、新幹線のトンネルは何の配慮もしないで、そのまままっすぐ掘った。こういうエピソードがあるのですね。

だから、一般のものはその次元で、100年で設計しているわけですが。原子力は、10万年とか40万年想定しなければいけない。40万年になると、約1キロずれるのですね。500年に2メートルですから。1キロずれても大丈夫なような設計なんて不可能だから、原子力施設はもちろん丹那断層の上には建てられないのですけど。だから、全然尺度が違うのですね。ですからこの10万年問題というのは、一般市民との間だけではなくて、専門家同士でも深刻な認識のギャップになっているなど福島事故で痛感しましたね。

(木村^浩) 環境省が、今度、放射性物質を含む処分場も環境アセスメントをすることになったわけですね。ゆくゆくは、高レベル放射性廃棄物の処分場の環境アセスメントも環境省がやるのですけれども、環境アセスメントというのは、機能が保全されている状況で、環境中にどういうインパクトがあるか、ということの評価するわけですね。

そうすると、高レベル放射性廃棄物の処分場の機能が保持されているというのは、いつまでですか、という議論が出てきて。まあ、数万年ではないでしょうか、という話になるわけです。そうすると、数万年後にどのくらい放射性物質がそこから出てきて、環境にインパクトがあるかということを経済省はアセスメントしないといけません。そうすると、経産省でやろうとしていることと何が違うのですか、って今もめているわけです。

まあ、それはおいておいて、今まで環境省が環境アセスメントでやってきたのは、機能保持されている期間に環境中にどういう影響があるかどうかなので、実は、高レベル廃棄物は自然に減衰していくからまだしも、濃度の濃い産廃とかは、30年間の機能が保持された状態でのアセスメントしかしていないわけです。

だから、逆に言うと、環境省が高レベル廃棄物の処分場のアセスメントを真面目に始めたら、他の産廃のアセスメントも大変なことになるのではないかな。産廃は、半減期無限大の物質ですからね。だから、「原子力だから数万年の議論」というのが、「原子力も数万年の議論」になってくるのでは、と私は思っていますけど。すみません、脱線でした。

—— ひとつ確認したいのですけれども、資料4-8の1ページ目の下から2行目に、『原子カムラ』の境界を越えられたかどうかという観点」というところがあるのですけれども、これは、どういうことをもって越えたかということのを来年度考えていくことになると思うのですけれども、少し明確にしながら検証を行なうようにしたほうがいいかなと。ここはすごく難しいところだと思うので。

(木村^浩) これは業務計画書なので、こういう書きぶりになっていますけれども、そのためにもやることはたくさんあって、それは明確にしないといけないなと思っています。

おそらく、「原子カムラ」というのは何なのか、ということに関しても、来年度は調査をして、ひとつの指標を作っておかないといけない。その指標が妥当かどうかということも含めての研究になりますので、そこは次年度の研究になるかなと思います。

—— 冒頭の土田先生、あるいは木村先生のお話にあった通り、「原子カムラ」の存在そのものも、認識の問題なのか、あるいは認識すら持っていない人にしてみれば、境界を越えたかどうかというのは判断が難しいですよ。

—— そうですね。専門家が越えたと思っても、市民は越えていないかもしれない。先ほどの認識の違いもあるかもしれないです。

—— そうですね。これはいろいろな議論の必要な部分ですね。

(木村^浩) まず「原子カムラ」という言葉が分かるかどうかという議論から始まり、その議論の中で、「原子カムラ」とはこういうものだ、という話もあると思います。

そうではなくて、原子力に携わっている人の集団の中ではどのように使われていたか、とか。

そういういろいろな側面から、いくつもの尺度で分析をしていかないといけないと思っています。たぶん一筋縄ではいかないですよ。

—— 原子カムラの話だけで、報告書が4、50ページになるかもしれない。

(木村_浩) ありえますね。「原子カムラ1」、「原子カムラ2」みたいな、いくつかのタイプがある、というような話とか、いろいろやらないといけないかなという気はしています。

—— どこかに、今後の課題も検討する、というのを入れたほうがいいのではないですか。

(木村_浩) どういう課題があるというのは、報告書のまとめのほうに書いていきたいと思っています。

—— あちこちで引用される可能性がありますね。

(木村_浩) そういうグレードの高い研究にしていけたらと思っています。

4. その他

(木村_浩) 最後に、少し時間が残っていますから、発言が少なかった方から一言ずついただいで、終わりにしましょうか。では、そちらからどうぞ。

—— やはり、本当に形ができてきたというのが実感としてあります。実際にマニュアルなどもできてきましたし。そういうものができあがっていく様子を間近で見ることができたというのは、貴重な経験だったと思っています。これからもよろしく願います。

—— 世論調査は毎年やっていますけれども、私は炉心設計をしていて、どちらかという技術寄りなので、歩み寄るとか、コミュニケーションするということでは、まだこういうところに出てきているものとしては理解があるのですけれども、会社に戻ると周りには設計者ばかりで、こういうことをやっていること自体をまず広めるのがいかに大事かというのを今感じているところです。そういう一般の専門的な人たちがいかに理解していくかということも課題だなと思いながら参加しています。

—— 非常に充実した勉強させていただいたな、というのが実感です。元気ネットで高レベル放射性廃棄物のワークショップをずっとやっていて、私もファシリテーターのサブとして、回数も多く参加していますけれども、その実践の中で感じたこと、見聞きしたことが、今回理論的なものによって補強されたというか。こういうことだったんだということ

が自分の中で整理されましたので、本当によかったなと思っています。ありがとうございました。

それで、実際にフォーラムを5月から実施するわけですが、その中でこの経験を活かせるかというのと。そのときにサブファシリテーターの役割を担うわけですが、そこが非常にドキドキするとか。いろいろ分かったのだけど、それが実行できるかどうかはまた別の問題なので、そこに向けて準備をしなければいけないという気持ちです。

それで、実は推薦図書があるので、*「たくらむ技術」*という加地倫三さんという方が書いた本があります。テレビプロデューサーの方なので、コミュニケーションの技術を実際にテレビの現場でどのように活かしているかということが書かれていて、簡単に読める本なので、とても参考になりました。ちょっとお知らせします。ありがとうございました。

—— 皆様の活発なご意見をいろいろ伺って、勉強させていただきまして、大変いい経験になりました。ありがとうございます。

きちっと形になってきて、本当にフォーラムができるんだな、ということが実感として感じられて、すごいことだと思いました。

私はずいぶん前から原子力に携わってはいるのですが、事故が起きたり、学科がなくなったり、いろいろな変遷を拝見しておりますが、今回このような形で、これからの社会にとっても役立つものができるのではないかなと思っています、そのお手伝いができただけですごく幸せです。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

—— 今まで計画をしてきたことが、5月以降の5回のフォーラムにつながるわけですが、そこで私たちが担うサブファシリテーターの役割はとても重要だなということを、ひしひしと感じています。一度、研修をしようと思っています。なぜかという、どうしても自分の持っている今までの経験の我流が出てしまう。私は特にそうなるものですから。そうではなく、本当に今まで学んできたこのマニュアルに沿った形をいかにできるかということを試されているのだなと思っています。頑張りたいと思います。

—— 先ほどもご発言がありましたように、実際の経験から学んだことと、それが理論的にどういうことなのかを照らし合わせられたことは、とてもよかったと思います。

フォーラム検討会議は自由にものを言える雰囲気だったので、自分の言いたいことが言えたのですが、全体会合の場ではある程度意見をまとめてから言ったほうが良いと思っています、自分に言いたいことを考えながら聞いていると、最後の頃にやっと考えがまとまるのですけれども、そうするともう会議が終わっているということもありました。

今日もあまりまとめられなかったのですが…。普通に会話している知り合いの女性の

方に、今何に興味を持っているのって聞いたら、今は原子力に興味を持って、本をたくさん読んでいます。それで、どうも反対ということだったので、電気代の話をしたのですよ。電気代が倍に上がっても大丈夫？ と聞いたら、一切そのことには答えを出してくれず、「とにかく人に迷惑をかけること自体が自分はどうしても許せないことだ」という倫理感でお話をしているので、何も言っても話が通じないなということが分かったのですよ。

それで、倫理観でものを決めるのはすごく簡単だなと私も思ったのですね。私は自治体の財政などを調べているのですが、世の中でものを決めるときは、倫理観で決めたり、経済で決めたり、好き嫌いで決めたり、いくつかの中から選択したり、いろいろな決め方がある、どれが正しいか分からないということになっている。でも、決めるのは私たちだということは確かだなと、最近思ったのですよ。

決定に関与する方法は、今、私としては選挙権しかないのですけれども、本当はもっと決めるところに行きたくて発言したいのですけれども、何かを決めるときに、その分野で科学的なことを専門になさっている人たちのいろいろな考えが私のところにもう少し分かりやすく入ってきたら、私の考えがもう少し広がって、選択がより正しくなるかな、と最近思うのですよ。

科学だけでものは決められないというのは、私は賛成なのです。決めてほしくもないのですね。断層があるからやめる、ではなくて、断層の危険性や安全性、100年後はどうなのかというデータを見て、私がどう思うか。今のことを考えるか、100万年後のことを考えて賛成するか。そういうふうに分かるといいし、そういう専門家の人たちとお付き合いしたいなと思いました。

—— 私は本当に一般人なので、こういう話を聞いていても、ほとんど理解していないと思うのですけれども。研究している方たちから見ると、たぶん小さな発見というのは大きな成果になると思うのですけれども、一般の方たちから見たら、枝分かれした先端にある小さな発見というのは本当に全然分からない。それが発見されたからといって、何なの、というのが正直な気持ちだと思います。10万年後の安全がどうのということよりも、今とか、5年後とか、近いことにしか興味がないというか。

なので、専門家の方の知識の地点と、一般の方たちの知識の地点が、かなりかけ離れていると思うのです。その差を埋められるように、もう少し分かりやすく説明していただけるとありがたいです。この研究も、とても素晴らしいと思うので、この研究を、もうちょっと同じラインで皆さんが共有できるようにしていただけたらなと思いました。

—— すみません、今日は直前に会合が入りまして遅れました。原子力に関する社会調査というのは、そのポイントポイントではだいたい出尽くした感というか、どういう結果になるかということがほぼ分かってきた、と思っているだけかもしれないけど、だいたい出尽くしている感があると思います。今回の調査は行動変容ということで、久々に私も結果

を早く見たいとわくわくしているプロジェクトですので、これからもできる限り参加させていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

(木村^浩) では神崎さん、締めてください。

(神崎) 今日は宣伝をさせていただこうと思います。木村先生が今度お入りになるパブリック・アウトリーチですけれども、これまでの成果がほとんどホームページに掲載されておりますので、ぜひご覧ください。

原子力学会のホームページから、今回のアンケート調査の結果を調べようと思ったのですが、どこにあるのか分からなかったのです。社会・環境部会を見ても、よく分からなかったのです。

—— それは反省点ですね。

(神崎) それで、PONPO のほうに木村先生がアップして下さったのを拝見して、ようやく入手できた次第でございます。

今までの会議の記録がだいたい入っておりますので、ぜひご覧いただければと思います。まだまとめはできていませんけれども、結構面白いデータがありますので。

模擬フォーラムを試行したときに、いろいろな知見が出てきました。それを参考に、来年度は面白いフォーラムになればいいなと思っています。どうぞ来年度もよろしくお願い申し上げます。

(木村^浩) ということで、来年度は、契約し次第、皆さんにご連絡して、またスケジュール等を組んでいきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

今年度は半年間で駆け足でやってまいりまして、感想にもありましたけど、どうにか形が見えてきたというところまで来ました。まさに皆さんのご協力の賜物ということですので、ぜひ次年度これを活かしてやっていきたいと思っています。では、今年度はこれで最後です。どうもありがとうございました。

以上